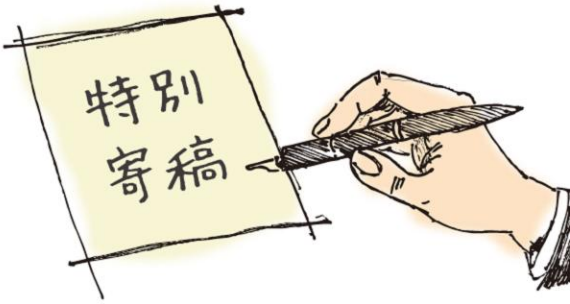
日本公認会計士協会

北部九州会

http://n-kyusyu.jicpa.or.jp/

2017.07
226号



日米硫黄島戦没者合同慰霊
追悼顕彰式に参列して

北九州・筑豊部会　廣瀬 隆明
Takaaki Hirose

去る3月25日、硫黄島で開催された第18回日米合同慰霊式典に参列しました。2年ほど前、衆議院議員のM先生に、硫黄島に行く機会があればぜひお供をさせてくださいとお願いしていましたが、3月初めにお誘いがあり、この機会を逃せばもうチャンスはないかもしれないと思い、予定をキャンセルしてM先生のご推薦ということで、参列することができました。

前日は私が非常勤の監査役をしている会社の株主総会が徳山であり、引き続き役員の勉強会や取締役会があったため、東京への移動は深夜になり、当日は朝7時に羽田空港集合というかなりハードな日程となりました。日航のチャーター機で8時に羽田を出発し、10時過ぎに硫黄島に到着しました。

（1）硫黄島

硫黄島は東京から南方へ約1250㎞、グアムやサイパンとのほぼ中間に位置している火山島で、現在でも年に10～30㎝隆起しています。周囲は約22㎞、面積は約22㎢です。昭和43年6月に小笠原諸島が本土に復帰した後、航空自衛隊と海上自衛隊の基地が置かれ、民間人の立ち入りは禁止されています。

硫黄島では昭和20年2月から3月にかけて日米の激しい戦いが繰り広げられました。日本本土の爆撃を行うB29の護衛戦闘機の基地とするため、またB29の緊急時の着陸場とするために米軍はこの島に目をつけ、日本軍もこれを阻止しようとした戦いでした。日本軍の戦死者1万9900人、戦傷者1033人、合計2万933人。一方米軍は戦死者6821人、戦傷者2万1865人、合計2万8686人で米軍の損害が日本軍の損害を上回った唯一の戦いといわれています。

日本軍の大砲

（2）慰霊式典

この合同慰霊式典は、硫黄島戦後40周年の昭和60年に「名誉の再会」として初めて開催され、平成12年からは平成23年を除き毎年開催されています。式典は11時からおよそ1時間、「日米再会記念碑」を取り囲むような形で行われました。参列者は日本側約150名、米側約170名で、日本側は退役軍人や戦没者遺族などの硫黄島協会関係者、国会議員、政府代表、政府職員、報道関係者などです。なかには硫黄島で足に砲弾を受け治療のため島を離れていた、102歳の横浜市在住の元陸軍兵も参列していました。

合同式典が終わると、日本側はマイクロバスで、日本軍の最後の拠点の一つである天山壕があった場所に設けられた天山慰霊碑に移動しました。ここでは日本側のみの慰霊式典が行われ、参列者全員が献花を行いました。

式典の後少し遅い昼食をとり、午後は島内に残る戦跡を見て回りました。

（3）戦跡

帰りの飛行機は16時半発ですのであまり時間は取れませんでしたが、約2時間、マイクロバスで移動しながら窪地に放置されたシャーマン戦車や日本軍の大砲、日本軍が潜んで抵抗した洞窟などを見て回りました。ある洞窟に入った時は、奥まで進むと火山島であるためすごい熱気で、1分も耐えられず早々に引き返しました。

さて、最後はすり鉢山です。この山は島の南西の端に位置する高さ169m、この島の最高峰になりますが、山頂に星条旗を掲げた6名の兵士の写真はあまりにも有名です。頂上まで道路があり、マイクロバスで上がることができました。

頂上から北東の方を見ると、島全体がはっきりと見渡せました。すぐ真下の右手（南）の海岸が米軍の上陸地点で、米軍は上陸後、島を横切って左手の海岸まで制圧し、徐々に北東の方に攻めていった訳ですが、その全貌が見て取れました。

当時この山からの眺めはどのようなものだったでしょうか。上陸前の爆撃や砲撃で草木はなく、岩や土がむき出しであったと想像されます。戦闘機や爆撃機が飛び交って、あちこちから爆弾が破裂する音が響いて、煙がたちこめていたでしょう。右手の海上には海を埋め尽くす米軍の船があったはずです。

（4）おわりに

硫黄島では現在も遺骨収集作業が進められていますが、いまだにおよそ1万3000柱あまりの遺骨が島の壕内に残されているとのことです。地下壕は全長18㎞、島の周囲と同じくらいの長さがあり、壕口も数千か所あったということで、遺骨収集作業は困難を極めているようです。一刻も早い収集の完了を願います。

日米再会記念碑と筆者